



分笑奇判

完

厚八拾八巻

18
2806



〜13
2806



2806

分笑奇判

く	同	く	わ	く	ぶ	く	ぬ	用	ら	ひ	ま
顔	なり	詰	う	く	ゆ	彦	子	明	眼	の	こ
前	や	溝	堀	一	は	ち	ま	ど	も	ろ	う
自	口	先	生	磨	く	風	強	乃	容	小	向
の	く	鉄	炮	の	流	火	と	サ	レ	永	目
ぬ	と	か	ア	リ	ア	ズ	バ	な	ん	と	先
杜	撰	サ	ン								

旧
1963.79

修くや

庚戌八月既望

本林散人著

○辭

詩一變して強うなり 騷一變

しく辞ややうきもどられハワガ俳諧や

たふハ一舞句は詩の辭もく自今此

一書に強とて心と朽るを規あるすや

然れさうづめ辞ハ自今の変化と考へたり

つめおかしきこと一しやうくちうきとて心と

しあどけきまておのくいすうろは清か

命とあし辭とたふハあつむハ所の

まゝいふれいみじかの梢ふりふ志
雪ちとら記しきるふり面白やねん
も匂い花よふらりくふれとはかり
よ白くものいろ吾面志らふら
く卯少よおねは湖の志願うし候の
をくしねと身のきくしかなる物と
東よ白くふらりや石山の観世音
せいの苦橋をね人乃つれなき命

のふらりためか
ちねやと能くし下みお同
よく味いしきる

○賦 物とありて京情とぞく

近松う作の鐘入の燈よ
門子好しあしきり花よ柳少あ
やをみ軒の燈籠二座の月

雨の節句や年のふれ下畧

○解

其半了の物の思情とよく

ほろどく

狂言小舞也

あしの山うさぎの山一志てまゐる
の何ごううらぬまふふりあつて
細くてもうてアんとほねる也

らやのうらぬるをいふ

○辨

清秘をたて火とも水よらひを

はす半懸河のおとくすゝあまや

志の原今計のちぢ子

まがえ来むりかをいすうがらよつめ
うい信流の雪るの雪水のうし
らう海はあはれうさぎやあま月

の氣も持ゆふ景徳園子と
トシヨリ

○説 古物と奉く可くは新

古の法と儲く大や 解辨説ハ

元おぐひあ

志招の曲小

此招像よ大本ヤ所り説とれ

吾事とかなる木の弓ささぬと

ふさぎ義支其雨と中らあり

しうの帝ちましうふ志やくと

おろし招しより招とちまと

トシヨリ

○傳 古今人物乃いふを黙然未

さぬくはト

思詠子

昔く藤を山一柴くり小波
川一洗濯をゆるる川らうらう
つううき極むる川から走り
しむ下畧

○序

物の序はりくよ詠茶の序
はり文俔一極あし見おを達

の作文中あそ此も婦清女が妙
場と探りおめ吉田のは師よ
え中をとりく具雅と平話よ
撰寫しよ紙百練のユまはら
文論及ひ法篇この極右いつれと
同し

古洞伝奇

あはれりくおまこの娘子つみ終る

わく人のいふあやしいつうさくたが
まじがゆゑ若界の船よ下略

○文 物くみやらふ中又文とたて

たゞ一篇いなり

川崎多岐小

跡ととぶく追くらばなみたる竹
の輝ひがたて道の^たまはる

いさゝのけのき路系註下畧

○箴 人と教へ世といふ一むく廻

さほく有る

狂言福ふ

いでくけついでまたのくあふ
語のあふくくせじ新起や
て是遊あふく人のあふも

いとよての〜女夫の〜お後〜
る〜寸ねの〜がや〜
福慶の〜おぶ〜
ふ〜中酒の〜
酒と〜の〜
樂〜

○論

この後論も愛万他活ぬふ

つげじ〜
あんど論の標^ホ準^ホ〜

兜軍記と〜

〜と母心〜
〜は〜
〜

○記

その本由事蹟つ〜

記

くはとりの浄るらよ
まは母國上郡ハ和徇年中
えぬ帝のひしよむつのおと
ワもつゆしお黒の山よあま
のおとあまのさるらよ
そくぬとあひあときさるらよ

○頌

時代と称譽——我ハ百集
とたさるら

器色ははははのまよ
あまの阿やの續の和志づのめお
いささうぐたは君おあまのあ
乃空集といのりまは

○書

福善の二休あ——とるら

ふの傷を

古代の江戸ふ

津よりいづの友い

ちしとらいつい

稲や花すも 下畧

○賛

物と讀みすも

遊ぶ

府下寺邊子

いふふや

ふふふ

いふふ

ふふふ

ふふふ

○銘

ふのふふ

と一字のまをいづれば後世に
 山の地より一段落起信のまよと看
 びしむすも雑極と俗よりなりし俗法と
 なる上の難少趣しめ教の難ありぬらり
 正法は心よと抄ありあはつらく一書を
 みるに信ありあ某の能^ウの^{アキ}の^ウく^{アキ}ズ^{アキ}門
 にはありあやうぬありんといはれり穴^ウし^{アキ}
 きて此二のまをいづれば江の十^ウあ^{アキ}我^ウ記^{アキ}

寛政三年亥正月吉日

江戸通油町

葛屋重三郎

尾州名古屋

永樂屋東四郎

書林

コ

